校友時報

昭和61年1月11日
編集人兼発行人
秋田県能代市高瑪2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　㈱大勝堂印刷

進路状況 めざせ難関突破

受験本番へ秒読み〈進学〉内定順調〈就職〉

十一月八日で六十一年共通一次の願書受け付けも締め切られ、三年生はいよいよ追い込みの時期に突入した。そこで十一月現在までの三年生の進路状況について調査してみた。

本校の今年の共通一次受験者は百四十四人で昨年より五人減であった。共通一次出願段階での第一志望校の内訳では秋田大学が昨年より三人増の六十七人で一番多く、次いで弘前大学十三人、東北大学が十二名、千葉大学が八人など続いており、今年も例年通り地元おろか東北地区志向がはっきりと表われている。系統別ではあいかわらず社会学部、工学部、教育学部、人文学部に人気が集中している。また今年の特徴として、理、工学部への志望が増えている。これは理工系大学出の就職率がよくなってきていることが理由といえるであろう。

ところで今年の共通一次も、昨年同様高等学校の正常化を理由に例年に比べ十日ほど遅らせたため、一月二十五、二十六日に実施されることになっている。それによって一次は冬休み直後のあわただしい時期より少し余裕ができる。

系統	人数
人文	35
社会	60
理学	18
工学	27
農学	11
医学	3
教育	75
芸術	4
薬学	3
家政	1
その他	18
計	255

系統別

人数／志望校	男	女	計
国立	108	36	144
私立	68	22	90
短大	1	8	9
専修	12	4	16
就職	54	9	63

進路志望状況

部説

親の姿から……

――ウチの親も、もう年なんだろうか――

このごろ、ふとそんなことを感じる時がないだろうか。父親が、背中を丸めながら新聞を読んでいる時。母親が、無愛想な顔をして台所に向っている時。彼らをいつの間にかとりまいている、哀愁を帯びた雰囲気を感じる時が……。

私達は今まで、何の苦労もなく楽しみながら高校生活を送ってきた。自分では、一銭もお金を払わなくても授業は受けられたし、部活も好きなようにやってこられた。修学旅行、遠足にしても、自分はたが楽しむだけでよかったのである。

ところが、親はちがったようか。私達が「いやだなあ」なんて思いながらしぶしぶ受けるこもある授業の授業料。「おもしろくない」と言って、しょっちゅうサボる補習の料金。乗ったり乗らなかったりのバスの定期代。その他にもいろいろからんで、月に三万にも四万にもなる私達の高校生活の代金を払うために彼らは死に働いてきたのではないのか。

例えば、父親は、もう向十年も動めて来て見るのもイヤになりそうな会社で。例えば、母親は、鳥カゴの鳥のように毎日同じことを繰り返しながら家の中で。楽しいことなんてほとんどない世界で。自分の人生が、こんなにもあっけなく終っていくことに対して何かやりきれない気持に襲われながらも口をへの字にして。ただ私達のためだけに……。

――「ウチの親なんでサイテーよ。勉強のことしか言わないし、いっつも○△さんは、あーしたこーしたって」

――「俺ントコのおとよ。いちいちうるさいんだよな。俺達にはいっつも○△さんは、あーしたこーしたって」

――「俺達なりのやり方があるんだからほっといてくれって言いたくもなるよ。」

日常の会話の中で、私達はよくこう言って親をこきおろす。しかし、それでよいのだろうか。いつまでもハンクツに親の皮肉かりを見て、それにかじりついているだけで。

父親が、背中を丸めながら新聞を読んでいる時、母親が無愛想な顔をして台所へ向う時……。私達は感じなくてはならないのだ。人生の半分を子供に捧げてしまった、そんな疲れたような親の姿から。……彼らの内側で、静かに息づいてきた親の愛情というものを。そして、それをしっかり胸で受けとめて私達は生きていかなくてはいけない。

講演 二十一世紀に向かって 岡野氏を迎えて

去る十月三十一日、午前十一時より本校体育館で、創立六十周年の記念講演が行われた。講師には元メキシコ五輪のサッカー監督であり、東大卒で現在、日本体育協会理事、日本サッカー協会理事、JOC総務主事、臨教審委員などの要職につかれている岡野俊一郎氏をお迎えした。「二十一世紀に向かって」という演題で、全校生徒及び職員、父兄に対し、豊かな海外経験とサッカー監督の経験をもとに、人生の糧となる内容をおよそ二時間十分にわたってお話し下った。

岡野氏は、自分の少年時代においてのサッカーの出会いから話を始められ、「スポーツとは根性だけでは絶対に勝てるはずがない」「若い時には一つのスポーツに専念するのではなく、いろいろなスポーツを幅広く行ってやることが大切である」ということをユーモアを含めて話された。更に現代の日本について「日本は世界で一番住みやすい国であるし、世界の中で嫌われている国でもある」と評し、日本の長所、短所を語られた。岡野氏の豊富な外国生活の体験を基盤としての話であるだけに分かりやすさの中にも批評眼をのぞかせており、生徒や職員の中には〝なるほど〟といった具合になるなずき姿も見られた。話が「私達は仲間の心を受けとめなければならない。そうでないなら自分達は二十一世紀に今まで通り生きていけるか心配であり、また日本の国も世界の国々についていく事が出来るか、考えさせられてしまう」と続けられるに至っては、岡野氏も力説され講演も最高頂に達した。最後に「私がサッカーの監督をしていて選手から教わったことは、人間にとって一番大切なのは人間性であり、そしてそれが未来につながっていく…という事だった。みなさんには、物を見る、考える視野、視点というものを是非大事にし、育っていってほしい」と語って講演を閉じられた。

これら全てはまさに二十一世紀を生きる私達に多くの感銘を与える内容であった。

穏やかな話ぶりの中に、時にはユーモアたっぷりに、また時には沈着な判断力に基づく鋭い観察眼を思わせる語り口に、聴く者をすっかり魅了し、万場拍手の大好評のうちに講演を終了した。

学科選択のために 秋大鉱山学部見学

去る十月三十日、秋田大学鉱山学部見学が、本校の二年生の希望者を対象として行われた。これは本校の進路指導部の企画で生徒達が鉱山学部を通じて、工学系統の内容実情を知り、今後の大学進学において学科選択の参考にしてもらいたいというねらいから実施しているものである。今年の参加者は九十三名でそのうち女子が十二名と、例年以上に関心の高さを見せた。

見学は鉱山学部の十一学科を採鉱、鉱山地質、冶金、金属加工、燃料化学、資源化学の鉱山、化学系統と機械工学、生産機械工学、電気工学、電子工学、土木工学などの工学系統に分けて行われたのだが、工学系統の方により人気が集中した。やはり今、巷にはハイオテクノロジーなどといわれている時代にマッチしているためのようだ。

各学科では教授や学生から学科の特徴などをビデオや実物、機械などを使用して説明をうけたり、研究室などを見せてもらった。

また、昼休みには、大学の食堂を利用したりして、大学生の気分をほんの少しだけ味ったようだ。

この見学は生徒達にとっては大学の内容の雰囲気を知るためには絶好の機会だったといえる。

尚、六十二年の国公立の大学入試についての発表により、鉱山学部も試験科目が減り、受験生の負担がちょっぴり緩和される様だ。

美術展成績奮わず

「第十八回全県高校総合美術展」は十一月八日から十二日まで、絵画、彫塑部門、十四日から十八日まで、書道、写真、デザイン部門と二部に分けて開催された。これは毎年行われる美術展だが今年は特に「第一回高等学校総合文化祭」の一環として行われたものである。この美術展には本校から、絵画部門には八点、写真部門に七点、デザイン部門に三点、彫塑に一点とそれぞれ出品された。今年は絵画部門で四点、デザイン彫塑部門で各一点ずつ入選したものの写真部門で入選なしという不本意な結果に終わった。

なお結果は次の通りである。

▽絵画部門
「見上げる人」　三A　嶺脇美貴子
「ONE LAST SUMMER」　二F　佐々木　晋
「人物」　二G　村岡　卓雄
「残された人物」　二B　佐々木正福

▽デザイン部門
「書籍ポスター」　三D　伊藤真紀子

▽彫塑部門
「自刻像」　二G　池端　正樹

見上げる人

出来事

税

十一月十一日、能代税務署で税についての座談会が開かれ、市内高校新聞部員一名が参加した。これは「税を知る週間」の一環として、日頃税にたいしてあまりなじみのない高校生に少しでも関心を持ってもらう為であるから、税に関する映画の上映やクイズ形式の説明を含め、約一時間半にわたって行われた。最後に署長より「将来はぜひ税務署員になってほしい」と勧誘の言葉があった。

吹奏楽

去る十二月二十二日、能代市文化会館中ホールで能代山本地区ブンサンブルコンテストが行われた。本校からは計五組が出場し、最優秀賞にサックス四重奏が選ばれた。また金賞に金管六重奏が、銀賞に木管五重奏、金管四重奏、パーカッション四重奏がそれぞれ選ばれた。

なお受賞者の名前は次号に掲載する予定です。

点

▼ハレー彗星が七十年ぶりに接近してきている▼この彗星の名は七十六年という彗星の公転周期を理論的に予言した第二代グリニッジ天文官長のエドモンド＝ハレーにちなんでつけられたことは広く知られている▼ハレー彗星の出現記録のうち最も古いものは紀元前二四〇年までさかぼることができる。以来、二十八回の出現回数が記録され、今回で二十九回の出現となる▼前回の出現は一九一〇年であった。この当時はまだ科学がそれほど進歩してなかったので、彗星の実体はほとんどわからず「悪いことが起きる前兆」というような迷信が信じられていた▼しかし、現在では科学が数段進歩し彗星のさまざまなことがわかってきている。今回の接近ではそれらを裏づけるため六機の探査機が打ち上げられている。▼ソ連の「ベガ」は彗星の核から一万キロまで接近することになっている。そして、そのデータをもとにしてヨーロッパ宇宙機関の「ジオット」がさらに核から五百キロまで接近し、核を細かく調査することになっている。また日本でも「プラネット△」別名「すいせい」で核のほぼ上尾の調査をすることになっている▼今回のハレー彗星の接近は、時期的には南半球のほうが観測しやすいのだが、北半球でも、大差なく観測できるといわれている▼日本では正月3が日と三月一旬から四月上旬にかけてが最も見やすい。中でも四月上旬の最も接近のときは、月も出ていないため肉眼でも見ることができる▼この彗星は、感度が四〇〇以上のフィルムと三脚さえ使えば普通のカメラでも簡単に撮ることができる。見て試みるといい▼ハレー彗星は七十六年に一度しか見ることができない。よって私たちとっては一生に一度のチャンスといえる。だからこのチャンスに、にわか天文学者を気どってハレー彗星を観測してみてはどうだろうか▼とかくこの機会をのがす手は絶対にない。

季節の窓

雪片のつれ立ちつくる深室かな

高野素十

雪がふりしきっている。そばをじっと仰いでいる。雪の一片一片が連れだちあうようにして降ってくる。そして連れだちあった雪片の群れでそらはいっぱいになる。